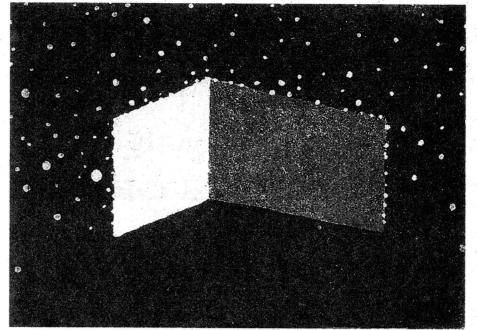


朝日 歌壇 俳壇



〈四谷にて〉 岩尾恵都子

俳句時評 蛇笏賞「澤」の配列

岸本 尚毅

俳句は一句一句が個々に独立した作品だ。個々の句を集めた句集は、こんどは句集という形で一個の作品となり、鑑賞や評価の対象となる。俳人は句集に収録する句の取捨選択に腐心するが、それに加え、本来バラバラの作品であった個々の俳句をどう並べれば面白くなるかを考える。句の配列は句集の魅力を左右するのである。

今回、蛇笏賞（前年刊の個人句集を対象とする最も権威ある賞）に決まった小澤の「澤」は、まさに句の配列の妙を感じさせる句集だった。たとえば「みづうみのあらなみに秋惜しむなり」に「琵琶湖上大風吹きぬ神の留守」が続く。一句目は「みづうみ」「あらなみ」という和語を生かし秋を惜しむ。二句目は「神の留守」（各地の神々が出雲に出かけて不在の時期）の琵琶湖に大風が吹く。仮面中心の一句目と漢字中心の二句目の字面の変化が楽しい。「みづうみ」と「琵琶湖」そして「あらなみ」と「大風」が響き合う。「秋惜しむ」から初冬の「神の留守」へと心地よく季節が移る。二句を並べ読むことで、読者は琵琶湖の風景を重ね的に味わうことができる。

あるいは「汗の腕置いて机や密着す」に「雲の峰かがやきてあり雲の奥」が続く。汗の腕と机が密着するわびげな夏から一転して雲の輝く壮麗な夏へ。その鮮やかな場面転換が読者を驚かす。隣り合う句と句の変化を楽しむ文芸と、蕉に精通した小澤の句集において、句の配列に連句的なセンスが感じられたとしても不思議はないのである。（俳人）

◇5月5日の歌壇俳壇面は休載します。

大辻隆弘歌集「椽と石垣」 第10歌集。「鈍よりも濃き椽のいろの夜がわが窓のかたはらにおほめく」（砂子屋書房・3300円）
渡英子歌集「しづかな街」 第5歌集。「レプリカの壁画への道に冬陽差しゲルニカは静か、しづかな街だ」（本阿弥書店・3080円）

☆は共選作。入選作はデジタル版にも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地ののがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。歌壇はネットでも投稿できます（週に2首まで）。QRコードから。

小林貴子選

- 街騒の届く御苑や夕桜 (柏市) 篠原 申八
- こんな世にこんな世だから蝶生る (大崎市) 笠原 直子
- 桜餅口に含めば涙味 (福岡県鞍手町) 松野 賢珠
- 春燈下天声人語明暗せり (柏市) 渡部 和秋
- 納税の義務春雨の中を行く (静岡県河津町) 岩城 紀子
- くちゅくちゅと挨拶なせり初燕 (千葉市) 宮城 治
- ☆窓外の雨が女神や大朝寝 (船橋市) 齊木 直哉
- 暈やあつらふる落つる大夕日 (藤沢市) 大内 晋子
- 死に傾くこの頃思ふ春の蠅 (高砂市) 小柳 献爾
- 国沸かす皇女一人の新社員 (宮城県山元町) 山田 庸備

【評】一句目、新宿御苑など、そこだけ雰囲気異なる都会の一角を大切に過ぐす。二句目、人間がごたごたしている世に生まれる蝶は哀れ？ 救い？ 三句目、桜餅の皮に込められた一縷の塩味、それが人間の涙味とは。四句目、「咀嚼」に共感。

長谷川權選

- 桜島噴く蠶大の真ん中へ (垂水市) 瀬角 龍平
- 黄金の腕の仮寝やみどりの日 (東京都文京区) 片岡 マサ
- 花の杜幾多の男征かせたり (一宮市) 岩田 一男
- 播粉木の音入魂の木の芽和 (伊万里市) 萩原 豊彦
- ☆窓外の雨が女神や大朝寝 (船橋市) 齊木 直哉
- きょうの春きのうの春の勿体無 (さぬき市) 鈴木 幸江
- 春が来た歩ける我が身畑に立つ (常陸太田市) 赤須 敏美
- 始まりは一年二組孫の春 (筑紫野市) 二宮 正博
- 翌年は閉校一人入学す (札幌市) 藤林 正則
- 今日だけは嘘はつかぬと四月馬鹿 (東京都渋谷区) 千葉 俊雄

【評】一席。堂々たる一句の構え。作者の心の反映か。二席。黄金の手枕。まるで温泉のお釈迦さま。三席。この神社から出征して帰らぬ人、帰った人。今は静かに花の中。十句目。せめてこの日だけは嘘をつきたくない。残る三百六十五日は？

大甲 章選

- 茶寿の母背負ふ軽さや啄木忌 (京都市) 室 達朗
- しほりくは咲いてるるなり落椿 (東京都足立区) 望月 清彦
- 山寺に酒豪姉妹や山笑ふ (巨田市) 蜂巣 厚子
- 追ふ蝶も追はれる蝶も遊びをり (多摩市) 金井 緑
- 修司忌の片道切符握りしめ (富士市) 村松 敦規
- 亡き母に二人のひ孫しゃばん玉 (東京都杉並区) 伊東 澄子
- 海苔舟の棹の操る光かな (静岡市) 松村 史基
- 故郷に住みて老いゆく夕桜 (玉野市) 北村 和枝
- 一億の一喜一憂桜かな (下野市) 久保田 清
- 春風や追ひつげきうで追ひつげず (岡崎市) 澤 博史

【評】第1句。108歳の母を背負い、「たはむれに母を背負ひてそのあまり軽きに立きて三歩あゆまず 啄木」を思う。母を背負って啄木は泣いたが室氏は語っている。第2句。椿は咲いた形のままぼりと落ちる。第3句。「酒豪姉妹」が豪快。

高山れおな選

- 放心のエンドロールや花吹雪 (羽曳野市) 菊川 善博
- 三分の二を寝てパンダ花に近く (伊丹市) 保理江順子
- 花満開鬼ごっこまた一人増ゆ (前橋市) 武藤 洋一
- 残雪の山なみはるか山桜 (長野市) 縣 展子
- 荷風の忌セルフレジにて豆腐買ふ (東京都板橋区) 藤倉 信
- テープカット促すごとく初蝶来 (いわき市) 岡田 木花
- 自灯明法灯明や西行忌 (福岡県鞍手町) 松野 賢珠
- 春寒や河原に刑事と死体役 (狛江市) 佐藤 淑子
- 春の闇鳥猫追ふ鳥猫 (大阪市) 今井 文雄
- おきなわでくごとうたべたはる休み (東京都練馬区) 小池 来翔

【評】菊川さん。エンドロールに比喻を超えた実在感あり。佐藤文香にく晩夏のキネマ氏名をありつけ流し。保理江さん。タンタン大往生。パンダは1日16時間寝るらしい。武藤さん。増えた一人は花の精？ 10席の小池さんは、小2。